



### 三好省三の

# 錦鯉ルネサンス

## 温故知新

②

### 見果てぬ夢の挽歌 I

昔、男ありけり  
名を小川陽一郎と云う



錦鯉ブローカー全盛の時代に、その頂点を極め、天才鯉師の名を欲しいままに日本中を席卷した男がいた。彼にまつわる多くの逸話や武勇伝は口伝でに広がり、嘘も真実も入り混じって、いつしかそれらは、まことしやかに語られるようになっていた。

そこで、できるかぎり忠実に史実をお伝えするべく、小川陽一郎氏の愛弟子である奥田伊津雄氏におうかがいを立てながら考証していくこととした。私ごときが書かせていただくのは、甚だおこがましいことは百も承知で



小川陽一郎氏の愛弟子である奥田伊津雄氏

あるが、「我が憧れのヒーロー伝説だけは誰にも任せたくない」という勝手な思い入れの深さだけで、原稿用紙に向かっていく次第である。どうか寛大な心でお許しいただきたい。

#### 予期せぬ出会い

私がまだ高校生だったころ・幸運にも一度だけ小川陽一郎氏にお会いすることができた。近所にお住まいの土肥敏久氏(第十三回

クちゃんはないだろうと、慥然とした表情の私に向かって彼はニコッと笑いかけると、肩をポンポンと二回たたいて、何も言わずに去って行った。すれ違ったとき、整髪料のいい匂いがしたのを覚えている。

「省ちゃん、あれが有名な小川陽一郎だよ」と、土肥さんから教えてもらったものの、鯉の世界を知らないどころか、鯉屋になるかどうかも決めていないニキビ面の少年にとつては、小川陽一郎がどこの誰であろうとどうでもよかった。

ただ、パンチパーマにド派手なジャン



第2回全日本総合錦鯉品評会で俳優・松方弘樹氏(右)と一緒に姿を見せた小川陽一郎氏

パー・肩で風切って歩き去る姿は、まるで北島三郎 みたいだなと思った。

その日のことを奥田伊津雄氏に話したところ、土肥さん宅へはシエパードの話で立ち寄ったのだろうと教えていただいた。小川氏はシエパードの世界でも活躍されていて、品評会では日本一を二回もお獲りになったそうだ。土肥氏もまた、シエパードで一度、日本一を獲っていらつしやるので、おそらく犬談義に花が咲いていたところに私がお邪魔したのだろうと思われる。

パンチパーマの強烈な印象だったが、じつは小川氏は強力な天然パーマだったらしい。たいへんなシャレ者で、いつも流行の先端のような身なりをしていたという。

余談であるが、私は彼のペイズリー模様のジャンパーに遭遇した日から今日まで、それがネクタイ売り場に並んでいるペイズリー柄のネクタイであるのが、居酒屋の店員さんが頭にかぶったペイズリー柄のバンダナであるのが、よろずペイズリー模様というものを目にすると、夕日を背に受けた小柄な男の姿がフラッシュバックするようになってしまった。まるで条件反射のように、である。

彼の強烈なカリスマのせいなのだろうが、このちよつとしたトラウマを、まさか四十年

今日ではまずお目にかかることのない「錦鯉ブローカー」。彼らは鯉の売買を通して、鯉の魅力を普及する伝道師の役割も果たしていた。その中でひととき目立つ「異才」がいた。

「小川陽一郎」その人である。これまで誰も触れたことなかった錦鯉ブローカー伝説を、自身が末裔であるという三好省三氏が、自らの見聞と周辺取材で浮かび上がらせた第一弾。

※ 本稿は三好省三氏のご厚意により寄稿いただいております。同氏はご多忙のため、不定期の掲載となることを読者の皆様にはご理解いただきたく、お願い申し上げます。(編集部)

全日鱗全体総合優勝の受賞者)宅へ、親に命じられるまま、餌の配達にうかがったときのことである。  
夕日を背に受けて、紫色したペイズリー模様のジャンパーに身を包んだ小柄な男性が、何やら熱心に土肥さんと話し込んでいた。そのころ、愛媛県の片田舎でそのような派手なジャンパーなど目にするのがなかった私は「このオッサン、いったい何者なんや?」と思いつつ、少し緊張しながらお二人に近づいた。

私に気付いた土肥さんは、その男性に「この子はねえ、三好さんとこのボクちゃんだ」と、紹介してくださった。いくらなんでもボロのかもしれない。

#### 銘鯉「槍の紅白」



それから時は経ち、二十六歳の冬のある日、私は突如として小川陽一郎フリークとなってしまうのである。

それは、旧々大日郎の炬燵に暖まりながら、間野實氏(初代大日養鯉場社長)と雑談していた時のこと……。

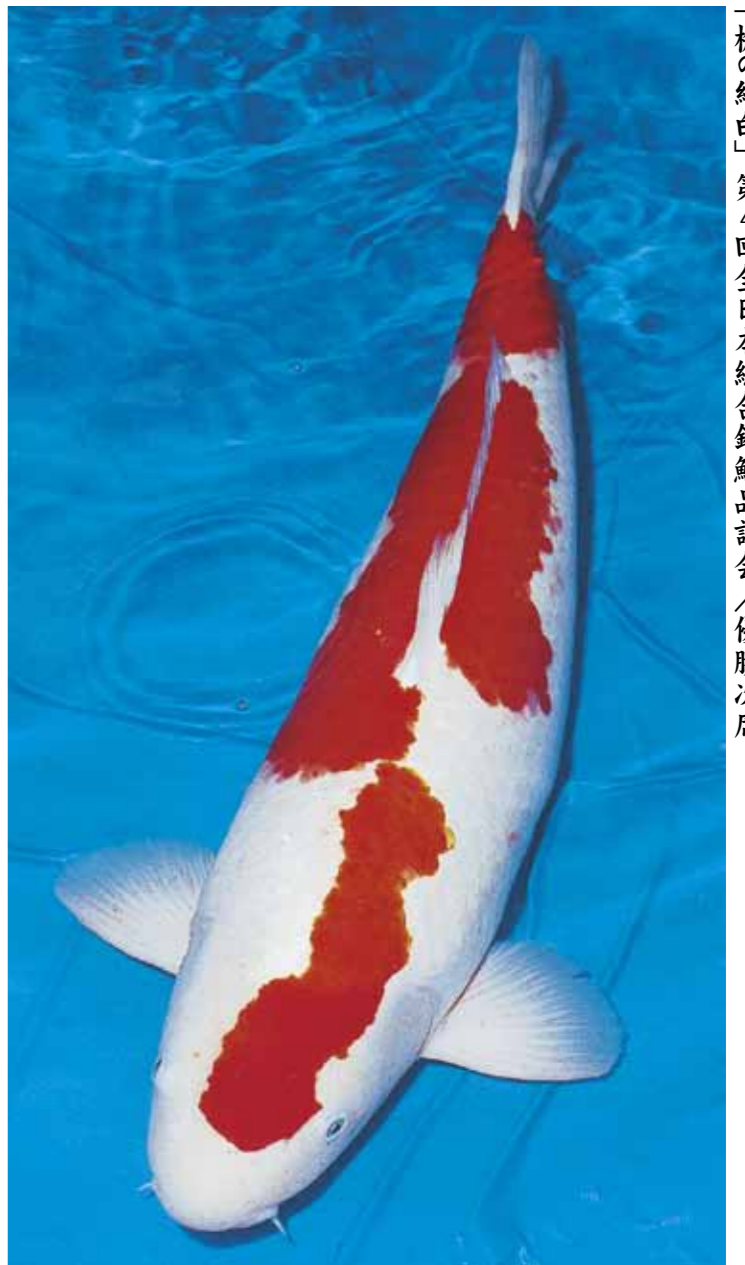
「大日さんが今まで作った鯉の中で一番好きな鯉は?」とお尋ねしたならば、即答で「槍の紅白」という答えが返ってきた。きつと「亀の甲」なのだろうと推測していた私には意外な答えだった。なぜかと問うてみたら、次のように力説してくださった。

「鯉の良し悪しでいうと、他の鯉かもしれないけれど、好きなのはやっぱり、槍の紅白なんだ。あの鯉はね、俺の将来の方向性を決めてくれた鯉だからね。」

質は良いけれど、あんな模様なので、いつか親にでもしようと思っていた矢先、小川陽一郎が突然やって来てね、『なあ、大日……



「槍の紅白」第4回全日本総合錦鯉品評会／優勝次席



あの鯉をオレに売れやっ！」って言ったんだ。彼ほどの男に売れと言われたら急に惜しくなってしまつて、俺はすぐに『イヤだ』って言ったんだ。

そうしたらね、『ほら・これで売ってくれや』って言って、女物のストッキングにお札を詰め込んで輪にしたのを、まるでハワイのレイのように首にかけられたんだ。別に金に転んだワケじゃないヨ！度肝を抜かれて、つい売ることを承諾してしまつたんだ。そうしたら陽一郎がね、『大日よお・お

一郎氏の所有となり、「槍の紅白」として抜群の存在感を世に知らしめることになる。

### 錦鯉清話

写真は、私が大事に保管しておいた昭和五十年頃の『鱗光』の一部である。「重要本」と記してあるものには、小川陽一郎氏の錦鯉

前はこういう鯉を目指して作り続ける。そうしたら、いつか絶対に旗が獲れる。質の良い鯉には、かえって模様がジャマになるときもあるんだ』ってね。・・あの時のヤツの言葉があったから、俺は『大日の鯉は質は良くても、模様が悪い』なんて批判されてもやってこれたんだと思う。

それとね、あの鯉に「槍の紅白」という名前をつけた陽一郎のセンスの良さ。・名前だけで、鯉の欠点が一瞬にして長所になつたという現実を目の当たりにしたんだ。

エッセイ『錦鯉清話』が掲載されている。

マジックで大きく書いた若き日の自分のヘタクソな字を眺めていると、わざわざ「重要本」と記したときの胸の内がよみがえり、気恥ずかしくもあるが、いつのまにか失つてしまつた純粋な気持ちを思い出させてくれる。

久しぶりに陽一郎氏の錦鯉エッセイ『錦鯉清話』を繙いてみたら、いまさらのように目からウロコが落ちるような衝撃を受けた。昭和五十年頃にして、氏の持論は常にユニークで、今でもちつとも色褪せてはいない。少しかいつまんでご紹介させていたどころ。

『夜もふけた雪の越後の囲炉裏をかこんで、鯉に憑かれた男がドロクに少し酔い、大げさなゼスチャアをまじえ、段々調子に乗って大声になる。・・そんな光景を思い浮かべながら聞いて欲しい』

こんな素敵な書き出しから、ご自分の理想の錦鯉とはどういうものかを切々と語りかけていらつしやる。

氏は一貫して、いかに原種とかけ離れることが錦鯉にとって重要

どうだい、省ちゃん？すごいヤツだと思わないかい？なんだか猛烈に陽一郎に会いたくなつてきたなあ」

我が尊敬する間野氏に、そこまで言わしめた陽一郎という人物に俄然興味を持つてしまった私は、もつと彼の話が聞きたくて、それからことあるごとに間野氏に彼のエピソードをせがむようになった。

いつもひとしきり陽一郎氏の話をしてくださいとあとで必ず間野氏は「嗚呼・陽一郎に会いてえ・・」という言葉で、話をくくられた。

それならばと、陽一郎氏の弟君である正則氏を通して、間野氏が会いたがっているというのを伝えていただき、熱烈なラブコールを送り続けていたのだが、ついぞ実現しないままになった。口惜しくてたまらない。

奥田伊津雄氏によると、「槍の紅白」は旧々大日郎の玄関前にあつた円柱型の生簀に泳がせていたということであつた。この生簀は、そんなに高価な鯉を入れておく場所ではなかつたので、間野氏もまさか売れるとは思つていなかったのだろう。パンストのレイの中には百円札も多く混じっていたらしいので、中身は案外少なかつたのかもしれない。のちにこの紅白は陽一郎氏によって吉田侑



黒木健夫氏(左)と一緒に審査する小川陽一郎氏

であるかを説き、やや押し付けがましい感も否めないが、ときには優雅に、ときにはドラマティックに筆を踊らせている。氏の錦鯉に対する並々ならぬ愛情が感じられ、血の通つた実のあるエッセイだと思ふ。

特筆すべきは、当時、全日鱗の会誌であつた鱗光であるにもかかわらず、会長の黒木健夫氏を名指して痛烈に批判している点である。こんな内容のものがよくも掲載されたものだと驚かされる。

この点について、愛弟子の奥田氏に訊いてみた。彼曰く、陽一郎氏と黒木会長は同等というよりも、むしろ師弟のような間柄であり、友人でもあつたので、たとえ陽一郎氏が何を書こうとも、特に立腹することもなく、「阿吽」の呼吸で解りあえていたという。

黒木氏にさえ歯に衣させない説教をするなど、堂々の貫禄・ブラボーの一言である。

まず、鯉師たれっ！

昔々、越後の山の中で、こげんことがあつたとき……

「もう少し負けろよ」と陽一郎が言った。「ふんっ、ダメだ。あんたらブローカーの人間には、鯉師の苦勞なんぞ解らんだろうが……」と、ある生産者が言いかけたのを遮つて、陽一郎の威勢のよい啖呵が乱れ飛んだ。

「なに〜？ 鯉師っていうのはなあ、読んで字のごとく、鯉の師匠のことだ！ 生産者もブローカーも関係ねえ。本物の鯉師っていうのはなあ、人に鯉を教え、導ける人間のことで。鯉で喰つてるヤツが、みんな鯉師だと思ふなよっ！ 少なくとも俺は鯉師だが、お前は鯉師なんかじゃねえっ！」

これは間野氏が話してくれた陽一郎のエピソードの一つである。間野氏は付け加えるように私にこう言った。

「生産者のなかには、ブローカーのことを悪く言う連中もいたんだども、俺はね、それは間違つてると思つてた。生産者とブローカーっていうのは、言わば車の両輪なんだ。俺たちがいくら鯉を作つても、ブローカー

と方向転換して生き残つたんだ。親父に感謝しろよ」

私はこの話を聞いたとき、積年の間、澱（おぼろ）のように溜まった心の闇のようなものが、サアツツとを洗い流されたような気がして、思わず嗚咽（なみげん）してしまつた。

三好養魚場は、生産者ではない。流通業者、つまりブローカーである。このことで若いころの私は、少なからず引け目を感じてきた。

「まったくブローカーときたら……」とか、「ブローカーは気楽でいいやねあ」などという皮肉めいた言葉や、軽んじられる言葉をいっただれだけ耳にしてきただろう……。私はブローカーというダーティーな言葉の響きを恨めしく思つていた。

そして、このようにややもすると人様から見下げられることのある職業を、男子一生の仕事として選んでよかつたのだらうか？ という気持ちで頭から離れないことさえあつた。

だから、そのタイミングで聞いた間野氏の言葉は、あまりにもタイムリーで心に響いたのだつた。

「陽一郎が言うように、生産者だ、ブローカーだのっていうよりも、**本物の鯉師**ってことが肝心なんだからな」と、力強く間野氏は言った。



獲得したトロフィー群

去る東京大会において、火と燃えるファイトが結実し数々のトロフィーを獲得いたしました。この快挙は偏にみなさまのご愛顧の賜と感謝いたします。



この鯉の解説をお寄せ下さい。一番素晴らしい方に記念品を贈り誌上にて発表させていただきます。

(ただいま新潟から沖縄まで525通)

大好評につき四月三十日までメ切を延期致します

品評会入賞率 日本一

小川陽一郎の鯉秀園

本店 北九州市若松区宮丸町8番地の2 TEL 093(76)2718  
養鯉場第一 北九州市若松区大鳥居  
養鯉場第二 北九州市若松区道岸

がないとスムーズに鯉が流通していかなくなつただろうし、鯉の愛好家も増えていかなかつたらうね。

共存共栄していたからこそ、今の錦鯉の繁栄があるっていうことを忘れてはいけなと思ふんだ。

だいたい、今のよう鯉が高値になつたのも、ブローカーがお客さんの心をつかむ「巧みの技」のおかげだあね。

陽一郎が言うように、本物の鯉師だつた彼

この日から私は小川陽一郎に心酔した。

陽一郎氏の愛弟子、奥田氏にこのことをお伝えしたら、「覚えてはいないが、いかにも彼が言いそうなことだ」とおっしゃつた。常々、このようなことを口にしていたのは事実であるらしい。

陽一郎氏は五十年前も前の時代に、錦鯉史上、初めて一匹の鯉を百万円という価格で九州のお客様に売り切つたのだと奥田氏は証言する。この百万円というハードルを超えたことを機に、加速するように錦鯉の値段は高騰していった。当時の貨幣価値を考えたら、ものすごいことである。

彼の錦鯉社会への貢献度は、はかり知れないものがある。やはり彼は本物中の本物の鯉師だつた。

愛すべき

ブローカーたちへのレクイエム

昭和五十年代の初旬……。我が家にはいつも誰かしらブローカーの人たちが寝泊まりしていて、さながら宿屋のようだつた。

当時、四国にはキラ星のごときスーパーパスターのお客様が揃つていたので、鯉を携えたブローカーが大挙して押し寄せてきたのだ。彼らは、まるで西部劇に出てくる旅人が馬



三好省三氏の結婚式でのスナップ。がっちり握手するのは、土肥敏久氏(左)と白川忠佑氏の日本一コンビ。当時、四国には彼らのようなスーパースターが大勢存在した

を休めるように、我が家で鯉を休ませ、大酒を飲んで語り、彼らが運んでくる新しい風と、全国の情報だけを宿賃がわりに旅立っていた。

私が学校から帰つてみると、我が家の居間は人の顔も見えないほどタバコの煙がもうもうと立ちこめ、熱の入った鯉談義の真つ最中だつたことはしばしばで、やれ水を持つてこいだの、タバコを買つてこいだのと命令されるのに、ずいぶん閉口したものだ。

しかし、一見してアウトローのように見えた彼らは、案外思いやりのある紳士たちで、私は本当に可愛がってもらつたし、鯉の教育も惜しみなく施していただいた。

個性の強い彼らは、ときに衝突もしていた

小川陽一郎氏が代表を務めた鯉秀園の広告。「火と燃えるファイト」などの彼らしい広告文や、広告掲載鯉の解説を求めるなど、実にユニークな広告である



全日本愛鯉会  
協賛業者  
横浜錦鯉センター  
横浜市港南区日野町5450-24  
電話 045 (841) 0339 千 233

横浜錦鯉センター(代表・栗原宗司氏)の広告。黒田節の一節を引いた格調高い広告コピーはさすがの一言

ようだったけれど、おおむね皆仲が良く、意見交換したり、ときにはタッグを組んで商売に臨むなど、その時々で臨機応変にシエアしあっていた。

彼らの「鉄の錠」はただひとつ。他人の売った鯉を決してけなさないこと。それだけだった。

彼らの中で、特に私が印象深く感じた二人の人物を紹介したいと思う。お一人は横浜錦鯉センターの栗原宗司氏、もうお一人は南国優鯉園の宮川一雄氏である。知る人ぞ知るお

二人と私の父とは、仲良し三羽ガラスのようにたいへん懇意にしていた。テンガロンハットを目深にかぶり、フリンジ付きのウエスタンスーツはキヤメル色。まるで西部劇に出てくる保安官のようないで立ちで、品評会場を闊歩する栗原氏。



栗原氏はこのようなテンガロンハットを愛用していた

口ひげをたくわえたその顔は、当時流行の男性化粧品『マンダム』のテレビCMに出て

でも、光沢や色の深さが違うだろう？一流の鯉と、三流鯉の墨の差っていうのは、まあ、こんなもんだ。

いつも俺が一流の物しか身につけないのはだなあ、常にセンスと感性を磨いておくためなんだ。センスの悪い鯉屋の鯉なんざあ、誰も買いたくないだろ？そこそこ、ようやく覚えておくように」などと、そんな形で彼は私に鯉の教育をしてくれた。あまりにも彼らしい言い草だったので、今でもはつきり覚えている。

かたや宮川一雄氏はどうと、苦みばしつたなかなかの男前であったが、その整った顔立ちに似あわず、信じられないくらい無精者で、そのギャップがまたいい味を醸し出していた。

彼はひとたび鯉のことを考え始めると没頭して、うっかり自分の膝でタバコの火を消してしまうなど朝飯前の人だったので、しばしばズボンに焼けこげた穴をつくっていた。

家のどこかで「アチチッ！」という彼の悲鳴が聞こえたなら、私の母はすぐに薬箱と裁縫箱を持って駆けつけなくてはならない。おかげでずいぶんツギハギが上手くなったとこぼしていた。

このように一般生活にかけてはだらしない



宮川一雄氏(右)と父(三好幸雄)

ところが後年、自分が輸出を手がけるようになって、特に八十五cmを超えるような大型鯉の場合には、たったコップ一杯の水の量が鯉の生死をも左右するということを思い知った。

ほかに何の取り柄もない私であるが、ショーゾーのパッキングはファンタスティック

人だったが、こと錦鯉のことになると人が変わったように、病的なまでに神経質になった。特に鯉の袋詰めにはうるさくて、手伝う私をイライラさせたものだ。

ある日、袋詰めを手伝っている私に、「おい省三。水が足りない。急いでコップ一杯の水を持ってこい」と命じられたことがあった。わずかコップ一杯の水を袋の中に注ぎ足すと、彼なりの黄金比率に適ったらしく、満足げにうなずいていた。そんなバカな？。である。

くだと、梱包だけは外国のお客様に誉められる。これも宮川氏の実地訓練のおかげであるう。

まったく家庭を顧みず、旅の空をこよなく愛していた彼は、「俺なんか、死して屍拾う者なしだ」なんて笑っていらつしやうだったが、末路はどうだったのだろう。。

大阪でお亡くなりになったと風の便りに聞いた夜、「せめてヤツの好きだったヘネシーで献杯してやろうじゃないか」と言った我が父も、今ではすでに鬼籍の人だ。

三度のメシより鯉が好き。

我が愛すべきブローカーという名の錦鯉至上主義軍団たちは、夢幻のごとく消え去ってしまったけれど、けつして彼らは錦鯉の世界に咲いた徒花などではなかった。時代の寵児たちが手がけた多くの銘鯉と、彼らが育てた日本屈指の愛鯉家たちがその証である。彼らの偉業と功績に、心からの礼賛とオマージュを込めて、この稿を捧げるものである。

ますます佳境に入る『見果てぬ夢の挽歌II』。来月号もどうぞお楽しみに。